取香遺産

Vol.91

大戸神社「和鏡三面」

御正体として奉懸された鏡

▲素円鈕松喰鶴鏡

▲素円鈕蓬莱鏡

▲花亀甲亀鈕蓬莱鏡

大戸神社は、大戸字本宮に鎮座する古社で、創建は景行天皇40年と社伝にあります。祭神は、天手力雄命です。

大戸神社には、和鏡が3面伝えられています。「蓬莱鏡」2面と「松喰鶴鏡」1面です。蓬莱鏡は、背面に波が打ち寄せる蓬莱山を表現しています。うち1面は、背面中央の紐を通す鈕が、甲羅に花を配した亀の意匠です。この鈕の形式を冠して「花亀甲亀鈕蓬莱鏡」と呼びます。もう1面の蓬莱鏡と松喰鶴鏡は、鈕が単純な円形であるため「素円鈕」を冠した名称で呼ばれます。

「花亀甲亀鈕蓬莱鏡」は、蓬莱山に遊ぶ鶴2羽と亀1頭を配しています。大きさ20・4㎝です。室町時代の作と考えられます。

「素円鈕蓬莱鏡」は、蓬莱山の麓に鶴2羽を並べて表現しています。大きさは19・5㎝です。背面に「正中2年」の墨書があります。この年に神社に奉納されたのでしょうか。「正中2年」（1325）は鎌倉時代の終わり頃です。

「松喰鶴鏡」は、背面に松の枝を啄ばむ2羽の鶴を表現しています。大きさは、径18・5㎝です。鎌倉時代の作と考えられます。

鏡は3面とも、文様が鮮明に鋳上がった優品です。また、それぞれ、縁の際に小さい孔が2つあけられています。御正体として奉懸されていたことが推察できます。御正体とは、神仏習合の考えによって、神体の本地仏を示した鏡像や懸仏のことです。神仏習合に対する当時の人々の接し方を、今に伝える資料といえます。

昭和55年2月に千葉県の有形文化財に指定されています。

問い合わせ
生涯学習課　☎(50)1224